

平方浩介さま

「日本一のムダ 徳山ダムの話」をお贈り頂き、厚く御礼申し上げます。

すぐに拝読しました。

胸に去来するものが多すぎて、メモのように書き留めたものはありつつも、お返事を差し上げるに至らないまま日が過ぎてしまいました。今も整理できないことが多いので、切れ切れのものを記します。

このところの郵便事情（投函のタイミング次第では、届くのに4日くらいかかったりする）からして、13日に垂井に伺うと決めて、そのときにお渡しすることにしました。

垂井でお話を伺うと、「あれ？これは読み間違いだったかな？誤解だったかな？」と気づくところも多いかと思いますが、現時点のものとしてご寛恕・ご査収下さい。

2022. 11. 12

近藤ゆり子

★ 私たちが1995年末に「徳山ダム建設中止を求める会」を立ち上げたのは、建設省が全国13のダム（河口堰）事業に作った「ダム等事業審議委員会」に、徳山ダムが入ったからでした。「反対運動」が展開されていたわけでもない、補償交渉は基本的には終わっている、住民も移転している…こんな徳山ダム事業に「ダム等事業審議委員会」を設置したのは、大反対運動にも拘わらず1995年7月に運用開始となった長良川河口堰の「代わり」でした（木曽川水系水資源開発基本計画の「続き」としての継続性があり、木曽川水系工事实施基本計画—当時の治水計画の名称—としても関係があるから）。

そして、間もなく、建設省の河川法改正推進勢力（一応「改革派」）に、「徳山ダム建設に異議あり」と公然と唱える何かしらの市民団体の登場を期待されていたのだ、とわかりました。私たちは、手弁当で建設省の一部に奉仕してあげたともいえます（そこに気づかないほど鈍くはありません。こちらも少しでもマシな河川行政への転換を促進するように働きかける手づる—甘くはない、緊張関係を孕みながら—になりうる、と割り切って付き合っていました）。

この建設省—国交省「改革派」動きは、淀川水系流域委員会の設置と展開という形で一定実を結びましたが、2008年に（「徳山ダム竣工」の直前です）守旧派に押し戻され、事実上潰されました。

「無駄なダムは作らない」と掲げた民主党政権下で、国交省の保守反動が渦巻いた—八ッ場ダム強行はその象徴—のは、皮肉であると同時に必然でした（あまりにもアホな前原誠司が国交大臣になったことも含めて）。

★ 私たち「徳山ダム建設中止を求める会」は、ある意味、建設省に誘い出されたともいえます。別の言い方をすれば、このときまで、動き出すことができなかったのです。

基本的には補償交渉が済んでいる、住民も下のほうに移転した。だから言える…

「今さら何を言うか！」と言われるのは百も承知でしたが、その状況だから「徳山ダム建設には反対だ」と声を上げられたのです。

★ 記憶が正しければ、1981年の元旦。前日の大晦日には雪が降りました。悪路の運転が大好きな夫（正尚）は、「坂内のスキー場に行けるかどうか、行ってみよう」と車を出しました。横山ダムのところで除雪は途切れていて、さすがにちょっと先には行けないな、と停まっていたところ、歩いて奥の方に行こうとする男性が追い越していきました。聞けば、「徳山に帰る」とのこと。バスが横山から先に行かないから、歩いて帰る、と。スキー道具で結構いっぱいになっていた車を片付け、何とか一人乗せられるようにし、奥に進みました。雪道ながら、鶴見までは行けたものの、その先は雪が深すぎて進めませんでした。ここから先には行けない、と告げると、その人は「あと半道だ」と呟いて車を降りて歩き始めました。車に同乗している間に気づきましたが、長くお風呂にも入っておらず、着替えもしていない様子。「稼いだお金を懐に、土産をもって、良い正月を過ごして村に帰る」のではなく、年越しできない経済状況で村に戻るのだと思いました。お礼を口にするでもなく（期待はしていませんが）、無表情に歩いて遠ざかる背中、およそ「元旦、ハレの日」には似つかわしくないものでした。その（哀しいというか重そうなというか）背中、もしかしたら、彼一人のものではない、徳山村全体にのしかかっているものの表象ではないか、とも思えて、記憶に残っています。

私は1977年に大垣に来ました。しばらくは「徳山ダム」のことは知りませんでした。1978年の後半頃でしょうか、地元新聞に補償交渉のことが載っていて、「徳山ダムって何？」と正尚に聞きました。彼も「よくは知らない」としながら、「（蜂の巣城で有名な）下笠ダムとは違って、地権者の反対運動は聞こえて来ない。ダムを受け入れた上での補償交渉の問題だと聞いている。補償交渉の問題となったら（下流域住民である）自分たちは口は出せない」と言っていました。これは、多分、一般的な理解だったと思います。

三里塚闘争で、鎖で自分の身体を縛って抵抗した大木（小泉）よねさんのことなどが頭に浮かべばこそ、「現地の人々が反対運動で頑張るべきだ、と（『外』の人間）はいえない」という思いが強くなりました。

★ その後も、悪路の運転が大好きな夫は、休日にはよく徳山村を抜けて未舗装の高倉峠越えの道を今庄まで抜け（今庄近くまで下ってから、道が土砂崩落で埋まっていた引き返したこともありましたが）、昼からお酒も刺身も出すお蕎麦屋さんに行きました。すでに集落は「歯抜け」状態でしたが、通るごとに、1軒、また1軒と家が少なくなっていくのを寂しく感じました。でも「しょうがない、『外』の者には何も言う資格はな

い」と思っていました。

★ そんな今庄への『お蕎麦食べ日帰りドライブ』の帰りに、徳山ダムと背中合わせになる丹生ダム建設予定地の「離村式」に出くわしてしまいました。

----- 弊ブログから転載 -----

◆弊ブログ（徳山ダム検察中止を求める会事務局長ブログ）より

丹生ダム跡地を尋ねるツアー(1) <https://tokuyamad.exblog.jp/32670425/> (2022.5.12)

(前略)

1995年の初夏には、徳山ダム建設事業審議委員会の設置の情報が、日本野鳥の会岐阜県支部のほうから、聞こえてきた。

「建設省が、たとえ口先だけでも『中止も含めて見直す』と言う事業審議委員会が”徳山ダム”に設置されるというのに、流域住民から反対のハの声もないまま、というわけにはいかない」と私は考えた。何かしら声を上げる団体をつくろう、と。

野鳥の会岐阜県支部の役員の中には「せっかくの機会だから、審議委員会の野鳥調査に協力して、徳山のイヌワシを確認しよう」という声もあった。岐阜県支部創設の頃からの会員である上田武夫さんは「徳山にイヌワシが生息していることはわかっている。『イヌワシが生息している』という調査結果を突きつければ、徳山ダムは止まるのか?」とその役員らに質した。「それは難しいかも・・・」との答え。「だったら調査協力なんてやめろ。これまでもあちこちの建設事業で、『調査に協力する』とやっっては、結果的に建設を進めることを手伝ってしまったのではないか。また同じことを繰り返すのか?」と鋭くおっしゃった。私はたまたまその場面に居て、上田さんを代表にして徳山ダム建設に異議を唱える運動を作ろう、と思った。

本来「貴重な動植物が生息する徳山を水没させるな」と声を上げて然るべき人たちが足を引っ張っている状況で、どんなふうに、いつ団体一運動を作るのか? 1995年中に声を上げないと無意味になってしまう・・・そんなことを考えている1995年の晩秋の日曜日だった。(あとから調べてみると、1995年10月22日。)

今庄に越前の太くて固めのお蕎麦を出すお蕎麦屋さん(刺身も出す)があって、休日にはよく食べに行った。

カーブの続く細い道、ダート、雪道などの悪路をドライブするのが好きな亡夫・正尚は、峠を越えて今庄に行き、別の峠を越えて戻ってくる、というハードなドライブを好んだ。

その日は、もうほとんどの建物が取り壊された旧徳山村を抜け、冠山峠へののぼりの途中を左に折れて、ダートの林道を走って金草岳の山腹を辿り高倉(こうくら)峠を越えて今庄に出た。

今庄からの帰りは、北国街道(国道365号)を通り、栃ノ木峠越えて近江に入る。いつもはそのまま椿坂峠へと南下するのだが、途中の中河内で、「左折 半明」という標識が目に入った。「はんみょう」という読みに惹かれて、その道に入ってみることに

した。

結構広い舗装の道路だ。分水嶺近くの川の上流部の山間になんでこんな「立派な」道路があるのだろうか？と不思議がっていると、「水資源開発公団丹生ダム建設予定地」の大看板が目に入った。

驚いた。

「水資源開発のための大型ダム」なんて計画は、徳山ダムが最後、と思っていたのに、徳山ダム予定地と背中合わせのようなところに水資源開発公団の大きなダム建設が進んでいる。自分達が「知らなかった」ことも衝撃だった。

人の気配のない集落跡をいくつか通って高時川沿いに下っていくと、鷺見（わしみ）という集落に、人が集まっている。注連縄風のものをつけた笹竹が何本かみえる。

聞いてみると集落の「離村式」なのだそうだ。

もうだいぶ陽が傾いていて、「何かの儀式は終わったが、まだ別に何かある」様子で、人びとは何となく時間を過ごしているようだった。

「離村式」という節目の日なのに、通りすがりの私たちの目には、晴れがましきも、悲しみも感じられない。その「特別な感情はない」「すでに決まっていることを淡々とこなしている」雰囲気、胸に突き刺さった。

故郷の山村に住み続けるという選択肢を奪ったのは、一体誰なのだろうか（「為政者が悪い」「鉄の三角形が元凶だ」という類いの話では済まない）。

このときの思いは、「徳山ダム建設中止を求める会」発足の背中を押すと同時に、旧徳山村の人びとを蔑ろにする運動にはしたくない（当時、都市部のダム反対運動の中には「カネにほったをひっぱたかれて移転した水没地の旧住民がダム推進の旗を振っている。環境問題などには全く無知で困ったものだ」というようなトンデモ「上から目線」の言動が存在した）と改めて思った。

そして、もし徳山ダム建設事業を中止する、という結論になったら、とても大変な作業（多分「建設」以上に複雑で大変なあれこれが）を要するだろう、とも思った。

それでも、というか、だからこそ「（すでに動き出した）公共事業を中止する」ことに、「この国」は真剣に取り組まねばならないのだと改めて思った。



鷺見、離村式の日、八幡神社の境内で、
竹を揺れている人を見てまで、遊覧船の型紙（1985年10月22日）

<吉田さんの写真集より>

この写真の数時間後に私たちは「鷺見」集落を通ったらしい。

-----転載終わり-----

詳細なことは調べ切れていませんが、高時川源流域七集落は、それぞれ集団移転（ま

とまって下流域に移る)を考えていたようです。ある時点まで集団移転への補助金(何とか『家移り』ができるぎりぎり程度)もあったと聞きます。ところが上流の三集落が移転したあとでこの補助金制度が廃止されてしまった…残った集落は知恵を絞って(あるいは『外』から入れ知恵されて)当時、琵琶湖を関西圏の工業地帯と大都市住民の巨大なため池に活用しようという「琵琶湖総合開発」に高時ダム(後に「丹生ダム」)計画を押し込むことにしたようです。ダムの水没補償金ならば、十分な移転の仕度金になる、と。実際、先に移った三集落より遙かに高い補償金を受け取って、残り四集落は移転しました。

結局、丹生ダム建設は中止となりました。この跡地をどう活用するかを巡って、元の地元住民、琵琶湖の自然を守る活動を長く続けてきた人々(琵琶湖を守る合成洗剤使用反対運動を積極的に展開したような人々…大体私くらいか少し上の歳の方々)が話し合いをしながら計画を作っているのですが、先に移転した三集落とダム補償を受けた四集落の間の「溝」というか「ぎこち無さ」は解消していない、と聞きました。

★ 「はじめに」で平方さんが触れられた「顔が赤くなるような」トンネルや橋の名前。私も初めてみたときには驚いて、いろいろ聞き回りました。そのときの資料は今手許にありませんが(「捨てる」ことができない性格故、ウチのどこかにあるのですが、探せない以上「無い」のと同じ)、ナンタラ学会の会長をトップとする財団とかに「名付け料金」として8億円～10億円を払ったはずです。(銘板作成料は別)。

「徳山村の方々のご要望」で、歴史や地理や伝承などを踏まえてエライ学者さんに名付けて頂いたのだそうです。そうした「ご要望」が一つもなかったと断言はできません。でもそんなのは、徳山村の大多数の方の要望でもなんでもなかったと思います。

このほかにも、私たち「外」の者が何かいうと「徳山村の方々のご要望」と返してくる場面はたくさんありました。

私たちが動き出すずっと前から、「徳山村の人々」と、「外」一揖斐川下流域住民・木曾三川下流大都市住民一とを分断する言説は、ずっと垂れ流されてきました。

★ 八つのムラの話、大変興味深く読ませて頂きました。

シツワラとイケダは、建設省資料には出てきません。シツワラー下開田、イケダー上開田と考えて良いのでしょうか？

★ 今回のご著書に書かれているのは、私たち「外」の、しかも遅れて徳山ダムに関わった者には知り得ない「徳山ダムの話」でした。ダムの話が持ち込まれてから、補償交渉が本格化するまでの長い「へビの生殺し」期間は、意図的かどうかはわかりませんが、建設側にとって有利に働いてしまったようですね。それでなくても、高度成長と浮かれる世の中で、取り残されそうな山村の未来を積極的に切り拓く気持ちも機会も奪われたまま放置されれば、結局は「国策」に従うしか選択肢はなくなるわけですから。

★ 私たちの活動が、新聞に載るようになったのは、1996年2月初めくらいだったでしょうか。「40年目、初めての反対運動」と書いた新聞もありました。

このとき、大牧さんから、かなり冷淡なお電話を頂いたり（紆余曲折を経て、2004年くらいからは大変親しくして頂きましたが）、村瀬惣一さんから連絡を頂いたり、「長良川を愛する会」の所秀雄さんが訪ねていらしたり、と色々な方との出会いがありました。

この地域で市民運動団体を立ち上げるのは初めてですが、他のこと（「健全な」学習塾団体に関する宣伝とか、平曲に関する話題提供とか）では「新聞に記事にするにはどうしたら良いか」のノウハウのようなものは持っていたので、たった4人で始めたにしては、いろいろな人と繋がる機会を得ました（3月に御嵩町での産廃問題の全国集会に行ってビラ撒きをしたのも、「効果」を發揮しました）。

この頃、本郷のNRさんご夫妻の訪問を受けました。「私たちの言えなかったことを言ってくれて嬉しい」と。

Nさんは徳山小学校のすぐ下の辺りに仮小屋を建てて、本当に立ち退かねばならないギリギリまで、夏の間はずっとご夫妻で徳山に住んでおいででした。1997年に近藤正尚が知事選に出る羽目(?)になったときも、昔ふうに一升瓶2本をからげて陣中見舞いにいらして下さいました。

そのNRさんは、1日何時間か、S工業の倉庫番をするという形で徳山村にいらしたのです。S工業社長・Sさんの「藤橋村騒動」で果たした役割、そして水資源機構とS工業の関わりからすると、Nさんが徳山現地で私たちと親しもうとするのはマズイのではないかと、こちらはかなり心配しましたが、Nさんご自身は気にされていないようでした。

Sさんの妹さんのHさん(ご夫妻で下開田でバイク修理業をされていた)からは「(Sさんを含め)私たちがダムに反対しているとき、あんた達は何もしてくれなかった」と厳しく非難されました。私たち「外」からみるのではわからない「ダム賛成・反対」の意識と確執があったのでしょうか。Sさん、Hさん、Nさんは、『本当はダムには反対だ、故郷を水底に沈めたくない』という思いで繋がっていたのかもしれませんが。Sさんとは直接言葉を交わす機会もなく、本当はどういう思いを持っておられたのか、知る機会もなかったのは残念です。

★ 1997年の初秋くらいだと思います。NRさんからの連絡で、扇谷の奥で保安林の不法伐採が行われている現場を確認に行きました。川筋(谷筋)の川原にトラックが通れるように簡易の道路が作られ(水の流れるところには鉄板を敷くなど)、だいぶ奥まで行くことができました。途中、カモシカの幼い死体が放置されていました。中村さんのおっしゃるには、「イヌワシが捕獲して飛び始めたが、何かがあって獲物を落としてしまったのではないかと」のことでした。扇谷の奥で、イヌワシが飛んでいるのをみました。(この不法伐採は県に通報して、止めることができました。) 保安

林不法伐採も頻発していたようですが、それとは別に、山林所有者に無断の盗伐のようなことも、結構あったようです。

Nさんにお話を伺っていると、徳山の自然に関しては本当に博識で、風や雲を読むことにも長けておいででした。Nさんが特別、というのではなく、徳山で大人として生きていくためには、必ず身につけねばならない事柄だったのでしょう。多分、徳山の方々がそうして身につけたものは、もし文字などで表そうとしたら、大学の図書館の大きな書棚の一つ分は軽く埋めることになるはずです。そうしたものが記録されることもなく（そもそも記録できるかどうか？）伝えられることもなく消えてしまうことが、とても残念に思いました。

大学に三行半を叩きつけて、世の中のいうところの真っ当な「高等教育」は受けずじまいだったからこそ、私は、机上、あるいは書物にあるのではない、智恵や技能や賢さが、もったときちんと評価されるべきだと思いつけてきました。

その土地に根付いて暮らす人々が身につけた智恵や技能は、都会で机の上で本を嚙って頭に入れたもの何倍もの価値があるはずです。でもそうしたものは正当に評価されることもなく、伝えるべき場所と人を奪われて喪われて行きました。

一村丸ごと水底に沈めてしまう類いの「権威ある賢さ」は、まさに「日本一のムダ」でしかない現実の側に嗤われているのだということに、まだ気づかない人が多すぎます。（だから、老朽原発を無理してでも使うだの、新たな原発を作るだのと大まじめに宣う「有識者」が、浜の真砂のごとく尽きない）

★ 運動の初期、集団移転の団地には、よくビラのポスティングに行きました。嫌な顔をされるのは覚悟で。徳山ダム事業審議委員会で顔を合わせることも含め、何人かの旧徳山村民と「顔つなぎ」ができました。そこで思い知ったのは、2つ。

(1) 間違っても、こちらから旧徳山村民の個人名を出してはいけない、ということ。出た個人名の方を激昂して罵倒する、というのはありがちなことでした。いろいろな行き違いやら…で「許せない！」という思いを抱えておいでのことも多いのだな、と。

(2) 私たちには「ダムなんか作って欲しくない。故郷を水に沈めたくない」と仰る方が、同じ口でマスコミに向けては「眼の黒いうちに徳山ダムの勇姿をみたい。一刻も早い完成を」と仰る。はじめは驚きましたが、どちらも本心だっただろうと思います。理屈では説明できない矛盾し錯綜した感情があるのだということが、だんだん理解できるようになりました。

★ 1998年7月に、江口聡秀さんから近藤正尚へ「土地の権利の一部を譲渡したい」とお申し出があり、近藤正尚と私の名義に書き換えさせて頂きました。「知事選で8万票の票をとったから」とのことでした。政党組織からは見向きもされず、これという団体のバックアップもない割には健闘し、法定得票を上回ったのは、愛知あたりでもあった当時の雰囲気（政治改革の「気分」のおかげでしょうか）。

すでに土地収用法に基づく事業認定（強制収用のための手続き）申請が出されてい

ました。事業認定処分がなされると土地の権利譲渡が制限されてしまいます。土地トラスト（共有）の手続きを急ぎました。「8月末、第3次まで」と決めていた登記手続きを済ませた直後の9月5日、正尚は急逝しました。江口さんが、《近藤正尚が土地トラストの土地を欲しがっている》という情報はどこから得たのか？正尚が「土地トラストで裁判をやりたい」と旧徳山村民に呟いたのはHKさんだけだったはずですが。ご存知の通り、HKさんは、水公団－水機構主催の「鍬入れ式」などに村民代表として参加されたりしていますから、公然とそう名乗りはしないでしょう、また江口さんに伝わるまでに何人かの人が介在しているのかもしれませんが、確かめようもない（個人名を出して確かめることは不可能）のですが、私たちが土地の権利を取得することに向けて動いて下さったのはHKさんだったと、私は思っています。一方で建設側に協力し、他方で建設にブレーキをかけることに手を貸す…故郷を抹殺される側の、ある意味では「智恵」だと思います。

ちなみに、「江口聡秀は、反対運動側に土地の一部権利を渡すことで、水公団－水機構から千万円単位のを引き出した」という方いる、と聞いています。ありうることだと思いますが、それもまた個人が「国策」相手に駆使するしたたかな「交渉術」だといえるでしょう。「旧村民は被害者で、被害者は清く正しくあらねばならない」というのは、当事者でない「外」からの押しつけ価値観にすぎません。

★ ダム問題では、全国あちこちに行きました。特に、九州の方々には、1996年の「スイトピアセンター貸出許可取消事件」では、市役所にたくさんの抗議ファクスを送って下さるなどの“仁義”もあったので、ダム問題（はじめは球磨川水系川辺川ダム、これがいったんは中止になってから以降は長崎の石木ダム）で比較的頻回に九州を訪れました（「コロナ」以降、行けていませんが）。何らかの形で下釜ダムに関わった方々とも出会いました。私が徳山ダム問題に関わっている、と知ると「村山輝道さんには会ったか。彼は本当によく調べ、記録を残していた。理路整然と話しておられた。すごい人だ、立派な人だ」と話しかけてこられました。

私は、村山輝道さんには直接お目にかかったことはありません。1996年以降、旧徳山村の方々と言葉を交わす機会が増えてからも、接点をもつことができなかつたのです。私が会った方々で、村山輝道さんに言及される方は、皆さん否定的で、とてもではないけど、「村山さんにお目にかかりたいので、お住まいの場所を教えてくださいませんか」などと言える状態ではありませんでした。九州で聞く村山さんの評価と、旧徳山村民の間での評価の落差に戸惑ったままでした。愛知大のWTさんが、村山さんが亡くなられた後、「段ボール5箱の資料を受け取った。整理して論文にしなければ」とおっしゃったのは、2005年くらい（記憶がはっきりしません）だったでしょうか。論文を書かれたという話は耳に入っていない、残念です。

★ 増山たづ子さんが遺された写真を管理しておられる方には、私のような者は、蛇蝎のごとく嫌われているようです。「反対運動に増山さんを利用した」と。

私は増山さんを、徳山ダム反対運動に「利用」したことは全くありませんが、確かに

そういう「利用」をした人たちがいました。いっしょくたにされているようです。ちょうど私たちが「徳山ダム建設中止を求める会」を立ち上げた頃、影書房というところから増山さんの写真集が出版されました。この写真集を取り上げて報道した「朝日・岩波文化」の流れは、増山さんを「徳山ダム反対のヒロイン」に仕立てました。マスコミにも多く取り上げられました。首都圏あたりでは、「徳山ダム反対なら、増山さんと親しいだろう」みたいな声かけをされたことは多々あります。私は「増山さんはダム反対とかには関係ない」と聞いていたので、話を逸らして逃げましたが。

このマスコミが作った虚像は岐阜にも押し寄せてきて、「岐阜で映画『ふるさと』の上映と増山さんのトークの会を開くから、徳山ダム建設中止を求める会も共催しろ」という話がありましたが、お断りしました(なぜ断る!とものすごく非難されました)。あのときに増山さんを「徳山ダム反対!というためのダシ」に使うのは間違いで、徳山ダム建設反対を掲げる私たちのような団体が、「映画『ふるさと』上映と増山さんのトークの会」の主催側になってはいけない、という判断は今でも変わりません。

こうした動きが、旧徳山村民を刺激したらしく、ある人(「慎重派」?)は、「あいつ(増山さん)がダム反対の闘士か?真っ先に同盟会に入った推進派のくせに!」と吐き捨てるようにおっしゃっていました。勝手に「徳山ダム反対のヒロイン」の像をつくれ、そのことで悪く言われる…お気の毒だと思いました。だから、こちらから積極的にお訪ねするのはやめておこうと思いました。一度だけ、他の方々とご一緒にお目にかかったことがあります。「自分の思いはあんたと一緒だ」と仰っていました。でも、増山さんの「思い」と、私の「思い」は同じではなかった、同じであるはずがない、と今でも思っています。

★ 都会では「ダム反対=善」「ダム推進=悪」と描きたがる“リベラルな知識人”がいっぱいいます。でもそんな二分法は都会人の驕りでしかありません。そして善悪二分法の背後には「ダムに反対しない住民(地権者)は、無知で哀れな人」という上から目線の決めつけが張り付いています。都会の傲慢そのものです。その都会の傲慢こそが、ダムを造らせたというのに…。

私が「ダム」に関わり始めてから四半世紀になりますが、この辺りはあまり変わっていないように思います。この問題は「ダム・河川」に限局した問題ではありません。どうすれば良いのかの回答は出ていません。多分、私の寿命のうちには回答は見つけれないと思います。

22年前に、社民党の機関誌「SD21 9月号の最後に書いたことを再掲します。

☆ 月刊 社会民主 SD21 No544 2000.9

【終わりに】

ある旧徳山村民がいう。「今でも村を出たのがよいか悪いかわからない。ただ出てきたことで、子どもに教育をつけてやることができた。これだけはよかったと思っている」。

首都圏に育ち、かつて大学を拒否して中退した筆者には、胸を突かれる言葉であった。学歴信仰は否定してきたが、都市で多くの情報に接する機会を得ることは、人としての幸福追求のための有利な条件となる、という見方は否定していなかった。

だがその背景には、東京を中心とする大都市を知性の頂点と考え、情報が一方的に流れるのを当然と考えてきた価値観、「進んだ都市と遅れた農村」という思い込みがありはしなかったか。そうであれば、たとえ「反体制」的な言辞を弄したとしても、中央集権・官億支配の政治システムと表裏をなすものにほかならないのではなかったか。

経済的条件もさることながら、この種の思い込みや価値観が、農山村住民の離村を促進させ、ダムや原発や産廃施設の受け入れを強いてきたのではないだろうか。

目的を喪失しても、なお自然破壊的公共事業が強行されていく要因は、種々指摘されている。情報を隠し操作する官僚機構、住民参加制度の欠落、利権がらみの政・財・官の癒着、民意を反映しない議会、公共事業の客観的評価システムの不存在等々。

しかし「悪いのは自民党や官僚たち、あれこれの制度」とするだけでは、「ダム」に現れた問題の本質的解決にはならないのではないか。私たち市民がみずからを変えていくこともまた求められている、と感じている。

都会で力を得た者が、経済や政治のみならず、人の価値観や思考法までも支配しようとする、実際支配できてしまっている、その構造は変わっていないと感じます。

「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」

人が人として、それぞれ大事にしたいものを大事にして生きることができる社会は、まだ遠いようです。